広報 るもい

◆連載 いま留萌むかし

●留萌の消防

明治二十七年（一八九四）礼受村浜中で火災があり、二十戸余りが被害をうけた。（明治三十年に留萌を訪れた河野常吉の野帳より）これが留萌の火災史上記録として残っている最古のものである。当時の留萌郡の戸数四百五十二戸、人口二千九十八人である。明治二十四年には新市街地の造成もおわり、ようやく北海道の一寒村から道北の拠点都市留萌への萌芽がみられるようになってきていた。

明治初年から次第に人口が増え、戸数もましてきた留萌でも、街並が整うにつれ、火災がしきりに発生するようになった。このため、明治十五年（一八八二）、当時留萌で鳶職をしていた亀本初太郎が私設火消し組を創設した。これが留萌の消防の始まりである。当時の消防設備といっても、組員の自前の梯子、鳶などの道具だけであったらしい。

明治二十九年（一八九六）「火消し組」を道内の先進地にならい「私設留萌消防組」に改めた。組頭は菅原直次郎、小頭には火消し組創設者の亀本初太郎と瀬戸末吉の二名があたった。消防設備としては竜吐水二台、長柄鳶二丁を備え消火活動にあたった。

明治二十七年、内務省は勅令第十五号により消防組規則を定め、全国の消防を組織化し、近代消防の基礎を確立した。これに伴い留萌でも明治三十年二月一日付で「公設留萌消防組」に改組された。初代組頭には私設消防組より引き続き菅原直次郎があたり、組員には留萌警察分署長より辞令が交付されたという。消防の器具置き場は留萌通り、（現在の市役所の前）で木造平屋五十平方米のものであった。

この「公設留萌消防組」が発足した当日、市街南記念通り（港町一丁目）の雑貨屋から出火し、辞令交付を受けたばかりの組員が駆けつけたであろうことがわかる。ただ、記録には詳しい事はのっていないので、推測するだけにしておく。

その後、明治三十九年、フランス式甲号腕用ポンプ一台購入。明治四十一年六月、前年の一級町村制施行に伴い、消防組を三部制とし、組員も百名に増員した。更に十二月には百十二名に増員、明治四十二年には腕用ポンプ一台を追加購入した。明治四十四年には一部より礼受村を独立し、四部制とし、組員を百三十五名に増員している。四部の内容は第一部本村、第二部川北、第三部臼谷、第四部礼受とした。

この消防組は昭和十四年に警防団として改組されるまで続いている。歴代の組長には留萌草創期の名士たちが名を連ねている。初代菅原直次郎、久慈貞次郎、五十嵐億太郎、佐藤喜代治、山本仁次、山田吉松、藤森樹治、佐藤静作であった。

満足な消火設備もなかった消防の草創期の活動は多くの困難を抱えていたことが推測できる。しかし、自分たちの留萌は自分たちで守るというこれら草創期の人たちの気概が感じられるのである。

昭和初期の公設留萌消防組本部

・特集 21世紀を目指したわが街の河川整備構想。

昭和63年3月／発行・留萌市
編集・総務部秘書企画課
印刷・株式会社 留萌新聞社

人の動き　男16,892（減20）・女17,686（減22）・合計34,578（減42）　世帯数12,916（減4）　1月末現在